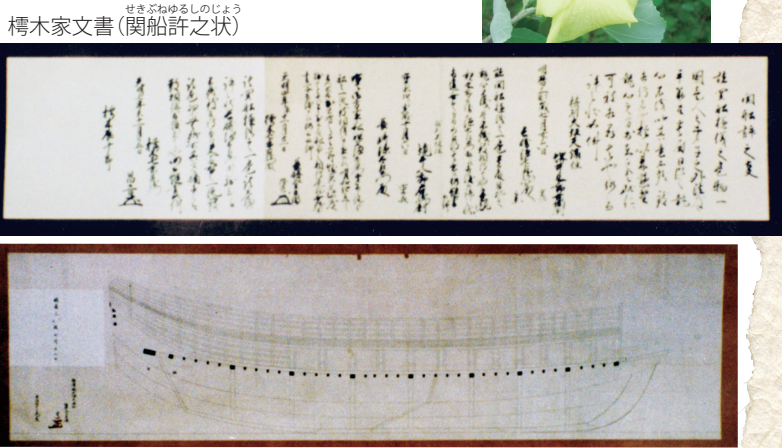




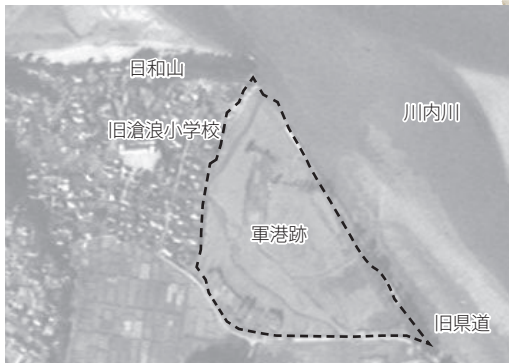
想夫恋(平成24年)



榑木家文書(関船許之状) 榑木家文書(安宅型軍船図)



久見崎軍港周辺空中写真(平成12年、国土地理院撮影)



久見崎軍港周辺空中写真(昭和27年、米軍撮影)

# そこが知りたい！歴史散策シリーズ

知っているようで知らない薩摩川内市に点在する文化財をクローズアップ!!

第3回 久見崎軍港・船大工榑木家関係資料



## ラウフェンブルガ＝橋渡 よし江

1961年長野県生まれ。フランス人の夫の仕事関係で19年前に本市へ。第3期薩摩川内市女性50人委員会会長、鹿児島県男女共同参画地域推進員などを歴任。現在も小学校の英語の※ゲストティーチャー、英仏語講師、市補助金等評価委員をはじめいくつもの役職を兼任。51歳。

※指導者として特別に学校に招いた各種職業人や専門知識を持つ人

功。また、子どもの卒業と共にPTAと疎遠になることが寂しくて、子どもたちに地元の良さや世の中の知られていないことなどを教えられるように、みんなで学習する会を立ち上げたりした。始まりはいつも、人との会話の中から。「こんなことができたらいね」と誰かが言つて、「じゃあ一緒にやつてみよう」とみんなで取りかかったただけだったと振り返る。

## モットーとするもの

モットーの「Think globally, act locally」(「大きく広く考え、地元で行動」)がある。それと「バタフライ効果」も心の支えだ。はじめは些細で小さな行動でも、人を介し時を経て、巡り巡って大きな成果へと繋がる可能性がある。もし最初の行動がなかったとしたら、その成果は生まれていないという考え方。これまでの経験からも、地域活動においても同じことが言えるのではないかと語る。地域を元気にするのは「ヨソモノ・ワカモノ・バカモノ」と言われることがあるが、彼らの強みはしがらみや前例にとらわれ過ぎないフットワークの良さ。自分にも通じるものがあるという。だからこそ、舞い込んで来る依頼事は断らないよう心掛けてきた。昨日まで知らなかった他人と一緒に活動する仲間になる。人と人が繋がり同じ方向を向いて考え、一緒に取り組み、新しい案が練り上がる。「この過程が私にはたまらない醍醐味なんです」。欲張るなら、地域や社会で

## 楽しみながら私らしく

「使命感や目指すものがあって突っ走っている訳ではありません。結果として人が喜んでくださることが多いので、やめられません。」受け持つ役職は手帳を確認しないとつい漏れるほど。私に出来ることを出来る範囲で私らしく、どうせやるなら楽しくてよいものを。「好きにやつてくれたのは、理解し応援してくれる夫と家族がいてくれたから。」これからも、目の前の人の話をよく聴いて、淡々と、でも楽しみながら続けていきたいーそれにつきます、と明言する。

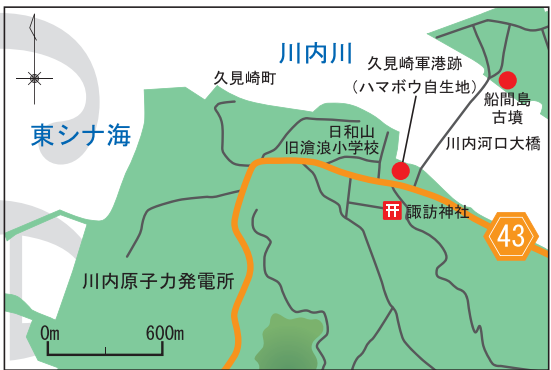


今年7月地元で開催した動物の殺処分と同行避難についての写真展 昨年12月地元で開催した東日本大震災写真パネル展

川内川左岸の河口付近に久見崎町があります。久見崎は古くは「掘前」と呼ばれていたことが今から約1100年前、平安時代初期の『文徳実録』と呼ばれる書物に記されています。その後、表記は「梧崎」、「くみ崎」と変わり、江戸時代に現在の名称になりました。慶長2年(1597年)の豊臣秀吉の第2次朝鮮出兵のときに、島津義弘らが一万余人の軍勢を率いてここから出航しました。この頃から、久見崎は軍港として利用されてきたようで、江戸時代の寛永年間(1624～1643年)に、船手と呼ばれる藩直轄の役所が置かれました。ここでは交通運輸の取り締まりや藩船の造船、修理などのほか、日和山での気象観測を行っていました。それ以前は、対岸の水引郷星原(現 湯島町)に置かれていたとされています。

造船に携わっていた大工頭榑木家には、当時の造船関係の文書が多く残されていました。この文書は、その後、全国的にも重要なものであることが分かり、平成7年6月15日に「船大工榑木家関係資料」として国指定重要文化財となりました。資料は、明暦3年(1657年)から享和2年(1802年)にかけての文書、※差図、道具類などの575点からなっていて、

## 今回紹介した史跡位置図



【問合せ】＝教育委員会文化課 ☎(23)5111(内線5231)